

『千葉妙見大縁起』絵巻の風俗史的研究

樋口誠太郎

一、はじめに

千葉市若葉区大宮町栄福寺所蔵の『千葉妙見大縁起』絵巻が平成六年二月に千葉県の有形文化財の指定をうけた。

その折に私もこれを見せていただいたが、もう四回目ぐらいになるかと思う、この絵巻は何回見てもあきない不思議な魅力をもっている作品である。無論国宝級の有名な絵巻物と対比すべくもないが、その様な名品にはないものを感じるのである。

この全体構成に関しては、千葉市立郷土博物館刊行『妙見信仰調査報告書』(平成四年三月)にくわしく研究成果がまとめられている。

私が一番最初に郷土史研究家の和田茂右衛門氏について、この絵巻を見せていただいた時には、かなりバラバラになっていた。その後補修されたが同時に、前後の錯款のある部分も訂正されずに補修

されてしまった処もある。それは前記の『妙見信仰調査報告書』にくわしく記されている。⁽¹⁾

従来この絵巻物について、いろいろな面からの研究があるが、いわゆる風俗史的な面から描画の特色をとらえ、そこに描かれている服装・武装・庶民生活・戦闘図などに注目し成立期の推定に迫ったものはあまり存在しない。

絵巻物には奥書に成立年代や補修年代・補修者(絵師)の名が記されているが、これらの正しさを証明するものとして、前述の様な視点からの研究が必要であろう。そこで、所蔵者の御了解を得て此処に、その様な視点から一文をまとめてみた。

なお、この絵詞スタイルの『千葉妙見大縁起』絵巻を所蔵する千葉市若葉区大宮の栄福寺は、千葉常永の家臣坂尾五郎治が勧請した妙見宮の別当寺として天承元年(一一三一)に建立された真言宗の北斗山金剛授寺を草創とした寺院であったが、寛永二年(一六二五)天台宗に改宗し、如意山無量院養福寺と改め、更に慶安二年(一六四九)に寺号を栄福寺と改め、昭和一七年に山号を坂尾山と改め今日に至っている。⁽²⁾

二、『千葉妙見大縁起』絵巻の構成

「絵巻物」と言うのは、中国では一枚絵に対して、「画卷」と言われる横長の長巻絵の形態で、「絵」だけしか描かれていないものと「絵」

と「詞書き」と言つて、絵の内容を文章で説明した部分が交互にあるものがありこれを「絵詞」と言っている。『千葉妙見大縁起絵巻』は、この「絵詞スタイル」のものである。

また、その内容を見ると、これは妙見尊信仰の利益を説いた典型的な「宗教絵巻」である。

まず「宗教絵巻」であることを示す此の絵巻の巻頭表紙の内側に描かれている妙見菩薩像の画像が神仏を描く典型的な方式に従い、左側から右前を向っている形で描かれている（写真1）。



写真1 千葉妙見縁起絵巻の巻頭の妙見尊像

これは中世以来の絵巻物における神仏の描き方の基本方式で、絵巻物のように目線が右から左へ移動していくものに対しては、左から右前に描くと神仏が突然目の前に現われた様な感じを受け迫力があるためであると言われている。

また、千葉一門の守護尊である妙見菩薩が合戦の場で危機に瀕した千葉氏の一族を救うために示現した場面を描いた部分もある。この構図は、明白に「矢取り」信仰に由来したストーリーを描いたもので、それは敗走しかけた味方の前に妙見尊が現われて相手から飛来する矢をとってしまふということで、ストーリーそのものは大して珍らしいものではないが、しばしば此の場面が妙見信仰を説明するときに引用されるのは妙見菩薩信仰の利益を示すものとしてダイナミックに描かれているためであろう。

此の絵巻物は、千葉一族の祖である平良文が平将門とともに謀叛を起こし、上野国の染谷川という川を渡るのに難渋した時に妙見菩薩が現われて救われたと言うことから妙見信仰に入り一族あげて妙見尊を崇敬しそれが子孫に伝えられ、下巻には千葉常胤と源頼朝の源氏再興のための活躍、その後千葉一門の歴史が記され、天文一六年（一五四七）に妙見堂御建立、天文一九年（一五五〇）に御遷宮を行ったこと迄が二三面の絵（上巻二面・下巻一面）と四一条項の詞書き（但し奥書き・補修名は除く）から構成されている。

この構成も検討する必要があることであるが本稿はそれが目的で

はないので、この検討は別の機会にゆずることにする。

三、『千葉妙見大縁起』絵巻に見られる風俗

『千葉妙見大縁起』絵巻は二三面に及ぶ絵が入っていて、それが中世後半期の風俗を示すものとして大変注目される。

後述する奥書に作成年代が記されているが年号と干支が違っていたりして信用することができない。したがって風俗史的な面からそれがいつ頃の風俗かと言うことを調べて正しい成立期に迫っていく研究が必要かと思われる。

(1) 服装について

『千葉妙見大縁起』に描かれている服装は多くの男・女、武士・庶民・僧侶、その他さまざまな人物が描かれていて、大変参考になる。概して、中世末期の服装をしていることに注目すべきであろう。

まず一番数の多い武士の平服姿について見ると、長い歴史の流れの中の武士の服装の考証などをして絵を描いていないので、たとえば鎌倉時代のストーリーの中に入れる絵も服装は、戦国末期の武士の服装をそのまま描いてある。このことは不正確という批判も招くが反対に作期を推定するには、現在では大変ありがたいことでもある。また地方に於て作成された絵巻物では、対象とする時代に応じて服装等の風俗を描き分けられるほどの絵師は存在しなかったと言

って良いであろう。写真2に見られる源頼朝であるが、「狩衣」を着用し指貫袴を用いて立烏帽子を頭にかぶっている。身分の高い人物を描き出そうとしたものであるが始めから描かれていたかどうか疑問である。また身分の高い人物であることを意味するために「妻折傘」を従者がさしかけている。これは「妻」は、しの意味で、はしが折れて（曲がって）いる傘ということである。公家は参内するときは必ずこれを調度として持参するので「参内傘」と言い略して「内傘」(台傘)と宛字を用いることもあったと称した。室町時代になると武家の行列の供奉用具(道具)となっていく、江戸時代になると袋だけを図1の様にしたものを持つていく様になった。したがって、此の絵は室町時代的要素の残っている時期に描かれたと言つて良いであろう。

また千葉氏の武士たちは侍烏帽子をかぶっている。頭の後ろの方に

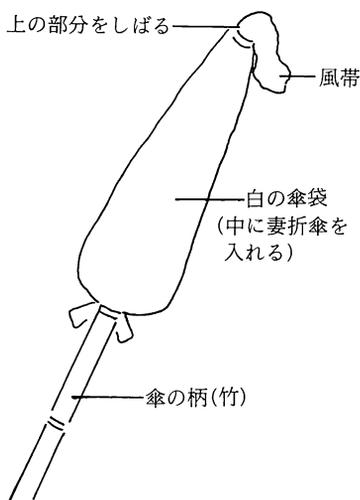


図1 妻折傘を入れた傘袋
(白の麻布で作る)

烏帽子がひっかかる様に描かれているのは、この絵巻物の成立年代を推定するひとつの手懸りともなる。

まず肖像画からこれに良く似ているものを調べると北条氏康像(写真3)や浅井長政像(写真4)にその共通した特色が見られる。いづれも侍烏帽子に氏康は大紋姿、浅井長政は素襖姿で描かれている。特に浅井長政の肖像には南禅寺の鍊甫宗純の天正一七年(一五八九)一二月に書いた讃がある。浅井長政は天正元年に居城小谷城で死んでいるので、歿後一七年目に描かれたと言うことが判る。写真2・5・6の中に見られる武士の風俗を見ると、この両者の肖像に良く似ている。

また千葉氏一族の武士たちの服装は直垂姿であろう。大紋でないことは「家紋」が描かれてないのですぐ判る。「素襖」であるかどうかと言うことになると、北条氏康の肖像画にある様に「胸紐」がなければならぬが、此の人物たちの服装は、どう見ても「胸紐」は描かれていないようである。その反面「直垂姿」に特有の「袖括」のひもが見られる。

なお各場面が全て同一期に描かれたかどうか考えさせられるのは写真2と写真6の場面の類似性である。源頼朝らしき人物とそれを囲む他の三人の配置は良く似ているし服装も後に随う二人の武士はほとんど同じである。武士が平時この様な服装をしているのは戦国時代の天正年間の前半ぐらいまでのことであるのでこの絵巻の成立



写真3 北条氏康像

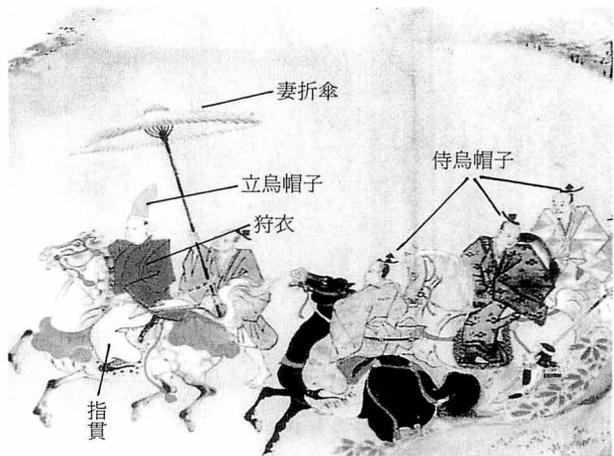


写真2 頼朝を守護する千葉一族(下)



写真5 千葉時胤及一門諸侍妙見宮に参拝(下)



写真6

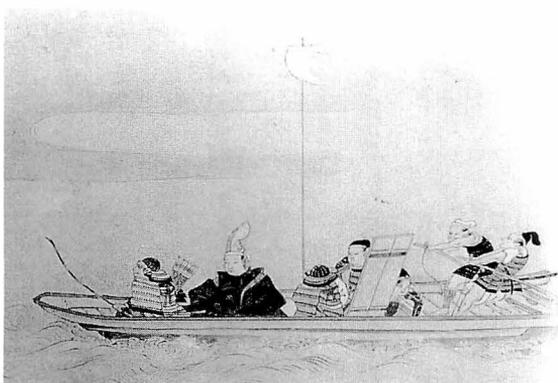


写真7 安房へのがれる源頼朝

も此の時期として良いであろう。但し源頼朝の將軍姿はおかしい、この場面に合致しない様に思う。絵巻物には長い年月の間に何回か補修の手が入られてその時に、本来は描かれていないものを加筆したり修正を加えたりすることは、かなりの名品にも見られることで珍らしいことではない。安房へのがれる源頼朝は「狩衣」を身にまとった貴人として不自然に描き込まれている(写真7)。

また庶民に目を向けて見よう。『千葉妙見大縁起』絵巻には雑多とは言わないがかなり多くの庶民が描かれている。写真8に見られる



写真4 浅井長政像

様に、十人ほどの男女が描かれ妙見堂を礼拝している。老若男女様々な人びとを具体的に描いている。妙見堂にひざまづいている四人を見ると前の二人の男のうち向って右の人物は手ぬぐいの様なもので頬かぶりをし、手に珠数の様なものを持っている。その左隣りの人物は武士の様で袴をつけている。その後には子ども連れの女性もひざまづいているが、これは小袖を着用しその上に女性用の袴(赤い色のものを多く用いる)をはき、その上に被衣を着ている。本来日本の服装は男・女共に上半身着と下半身着に分かれた上下二部制が特

色とされていたが、室町時代から全身着服制に変わり特に女子の服装から此の傾向が顕著になる。『千葉妙見大縁起』絵巻に描かれている人物は丁度此の変化期にあたっている様子が庶民の服装に良く出ている。絵巻物に描かれている風俗は、その絵巻物が描かれた時代の風俗を反映していると見るのが一般的であるので、奥書きにある享禄元年(一五二八)でも天文一九年(一五五〇)でも作成年代として大きな矛盾はない。また写真9の絵に見られる男女は、いずれも上・下二部制の服装をしている。宗教絵巻には僧侶が登場するが

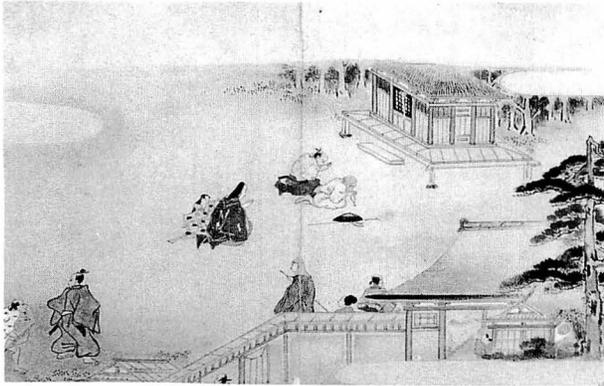


写真8



写真9 上・下二部制の服装をしている男・女



写真10 僧侶と神職



写真11 高望王と后が妙見に祈り良丈を守護

僧侶や神職の服装は歴史的にあまり大きな変化はない、僧侶は白の小袖の上に黒の法衣をつけ袈裟をつけている。神職は烏帽子姿で左側の二人は白丁を着ているので雑色であろう。また男・女二人が立っている場面(写真10・11)があるこの絵は『千葉妙見大縁起』絵巻中最も不可解な部分であった。これは位置が違っているためで、この絵の詞書きが右側に二行簡単に記されている。内容は「高望親

王同后、兩輪祈給故妙見大菩薩頭給而良文守護^シ給^フ所也。」とあるので、此の良く判らない人物が高望王とその后を描いたものであることが判る。これが判りにくかったのは絵と詞書きがずれている(前の方にある)ためでもある。もうひとつはこの様な服装が何によつて描かれたか判らなかつたためでもある。

これは江戸時代の公卿の男女が礼服を着用した姿で、頭に礼冠、大袖・小袖・表袴・尚衣綬・牙笏^{シヤウソク}・襪^{ソク}・烏皮・くつ等を着用している典型的な姿である。但し時代的に見るとかなり後世のもので、或いは補修時に狩野探幽の門弟である補修者の片山三清守長が狩野派に伝わっている故実をもとに描き加えたとも考えられる。

江戸時代には有職故実の研究も盛んで、絵画にもそうした成果が反映している例は、よくあることであつた。しかし地方の寺院に伝わつた絵巻物にその跡が見られるのは珍しい。原画作成のときのものとは思えないので、後代の補修時の加筆かと考えた次第である。

(2) 武装について

『千葉妙見大縁起』絵巻には、いくつかの合戦の場面が描かれている。それは妙見尊を千葉一族共通の『軍神』として、崇敬の利益を強調しているためである。

しかし、平将門・平良文の時代から千葉常胤の時代に至る迄の長い期間の武装を全て同じ様な甲装で描いている。写真12の絵巻上巻

に見られる場面は平将門の乱の時に平良文が将門に味方し、上野国に侵入し染谷川を渡ろうとした時に水量が増して、大変苦勞した折に突如童子(妙見尊)が示現し浅瀬を教えしてくれたことを描いたものである。騎馬の鎧姿の二人の武将のいずれが将門で、いずれが良文かは判らないけれども着用している鎧そのものの描き方は、あまり良質とは言えない、大鎧の袖にしても一枚の板の様に描いている。しかし全体的にバランスが良くとれているので或いは補修の時に塗りつぶされたりしたのかも知れない。写真13は合戦の場に妙見尊が



写真12 染谷川を渡る平将門と平良文

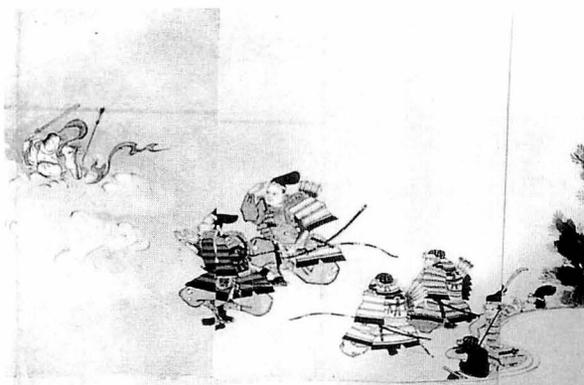


写真13 平良文妙見尊に救われる



写真14 平良文妙見尊に祈る

示現し敗色濃い平良文勢を救った場面で、前述の如く戦国時代に良く見られる矢取り伝承のひとつでもある。この場面には大鎧姿の武士四人、腹巻姿二人(一人は不明)中央の大きく描かれた烏帽子をかぶった大鎧姿の武士が平将門と平良文の様で更に手前の妙見尊に手を合わせているのが平良文であろう。それは写真14の場面の詞書きに「(前略)平良文陸奥守成延長元年^{末癸}正月十一日辰尅朝日最中向帰命日輪奥両国者知行可然者関東八ヶ国主成給御祈念深内從^二東方一金色之光飛来而良文鎧之射向袖乗移給、奉見^二妙見大菩薩之御影

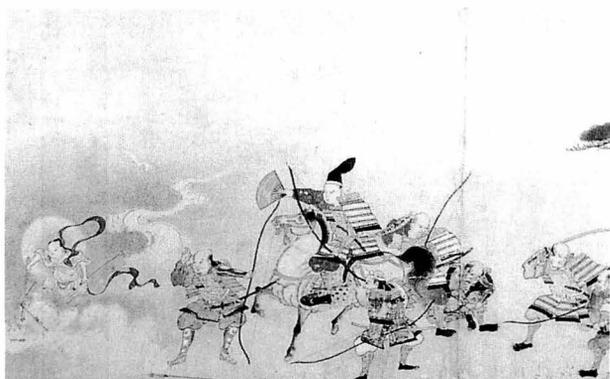


写真15 千葉常胤の孫小太郎成胤千田親政と戦う



写真16 千葉常胤の孫小太郎成胤千田親政と戦う

御座一、良文喜悦之思成偏憑敷或思打出（中略）良文天之与所思奥州下給後将門ト一成上野国乱入給也。」とあり画面では左上から右下に御光の様なものがさしている。これは詞書に見られる様に妙見菩薩の加護を暗示したものである。この場面の良文の鎧姿は良く描かれている。右手の自然描写の巧みさは大和絵から宋・元水墨画の技法が十分に生かされていると言えよう。

写真15・16は一場面であるが便宜上二つに区分した。此の場面は戦闘の場面が非常に良く描かれた部分で『千葉妙見大縁起』の紹介

という場合は良く此の部分がりあげられている。

写真15の馬上の武士が千葉常胤の孫小太郎成胤で此の絵巻の詞書によりれば武装は次の様になっている。「成胤其日、装束、褐巾かちんの直垂唐綾之鉢巻梨打、烏帽子拵纏鎧熊皮ノモミタヒ（踏）鶉羽之征矢負漆籠藤（籐）弓ヲ持長毛馬ニ乗鎧踏張是桓武天王三代御孫陸奥守良文ヨリ八代、千葉常胤、孫胤政嫡子小太郎成胤生年十七才…（下略）」とあるので成胤の鎧姿をそれを見たと「褐巾」の直垂、褐色の鎧の下着を付けていると見ると緑色の直垂である

ので、これは色がはげたので塗るとき詞書きを良く読まなかったであろう、また周囲の成胤をとりまく武士たちは熊の毛皮で作った「したぐつ」（モミタヒ）をはいている。またその武士たちの鎧の色は絵の具がはげ落ちてしまった様である。

また馬は両方に描かれているもの共に、足首が細く描かれ軽快な状況を表らわすことに工夫が見える。

写真16は千田親政側であるが落馬しているのが親政で、その他の武士たちは、胴丸姿である。手にしている弓は重藤の弓である。

(3) 祭礼について

『千葉妙見大縁起』絵巻は宗教絵巻であるので当然祭礼に関する部分もある。上巻の最後の部分に次の様な詞書きと絵が入っている。

「惣代七社大明神申奥州守良文平親王将門上野次郎忠頼下総権介忠常文次郎常時同娘二人是也。七社大明神現給此社八人神楽男四人八乙女是集而御一門國中祈給依之妙見大井政所申也妙見堀内御坐し時ノ儀也。…」とあり右手に惣代の宮があり向う側に神宮寺薬師堂が描かれ、その前で八人の女性と五人の男性が楽を奏している（写真17）。此の部分では神官は立烏帽子をかぶっているが額が大きく出ていること男女共に眉がはつきり描かれていることなどは室町後期の特色であると言って良いであろう。

惣代七社と言うのは院内の惣鎮守として造立され、千葉妙見に貢



写真17 惣代上社大明神の前で

献した人々を祀っている⁽⁵⁾。こうした祭礼を主催する側の風俗というのは、あまり大きく変化はしていない。中央部の奏楽に合わせて舞っている二人の女性は前に引用した上巻の詞書きに在る文次郎常時同娘二人是也に合致するものであろう。此の他の処にも神官は描かれていますが装束は皆一様である。また此の他に千葉常時が妙見を安



写真18 惣代上社大明神

置いて、二人の娘を八乙女にし自分は太鼓をうって神楽を奏上して妙見をおまつりした場面を描いたものもある。常時(文次郎)は神官ではないので、此处では直垂姿で、烏帽子をかぶっている。女性は二人とも白の打掛を小袖の上に羽織っている。写真17、は写真18と良く似ている。唯後者の場合は惣代宮となっているが前者は惣代七社大明神となっている。但しお宮は描かれていない、この惣代七社大明神とは、良文・将門・忠頼・忠常・文次郎常時と常時の二人の娘で

ある。妙見が堀の内(千葉大医学部の近辺の古地名とも言われる)にあった時その七社大明神で神楽男四人、八乙女二人が集まって一門、国中のことを祈り、妙見大菩薩の加護を願っている様子が描かれている。「縫い越」と言って肩口のあいている白い狩衣を着用している五人の男性がいる。これは四人の神楽男と神官でその他二人の八乙女が何事かを祈っている。おそらく国中の平穩、一門の繁栄を祈っているのであろう。女性の衣服を見ると下着が出ている様に見えるがこれは「三重」とも言い表着と裏地の間に中陪ちゅうばいと言って絹の布を入れる女性の神に仕えるときの服装の一種を描いたもので、下につけている布や衣服が「おめり出て」見えるのである。また、この絵巻物は祭礼の場で描かれた人物に限らず全体的に衣文線は曲線的で柔らかい感じを受ける。これも中世後半期に多い描画の特色である。

四、おわりに

『千葉妙見大縁起』 絵巻の上・下巻を見ると、以上述べて来た様に風俗史的な視点からいろいろなことが判る。絵の質(描画の水準という点)から見ると地方のものは拙劣という先入観にとらわれがちであるが、此の絵巻は比較的良く描かれている。「良く描かれる」ということは、風俗史的に見て、その絵巻が描かれた時代の風俗を良く反映して描かれているということである。

此の絵巻は奥書きに次の様に記している。
上巻

下総州葛飾郡千葉北斗山金剛授寺／妙見大菩薩大縁起門前不出也

本庄伊豆守 胤村

享祿元年申子^(二五二〇) 林鐘廿二日^(六)

下総州千葉庄池田郷北斗山金剛授寺／妙見大縁起分福寿常住四位
萬栄

寄進 本庄伊豆守胤村 [印]

九月吉日

本庄伊豆守胤村 [印]

天文十九年^(二五五〇) 名取月廿八日^(九)

これを見ると寄進者は本庄伊豆守胤村であるがこの絵巻が作成された年代として二つの年代が見られる。その一つは享祿元年で他の一つは天文十九年である。両者の間に約二十年の差があるが、どのような立派なものを作ったとしても、二十年近くかかったと言うことはあり得ないので、いずれか一方に定める必要がある。

『千学集抄』には「妙見宮御建立は国守平親胤、原式部大輔胤清、住持寛胤の御時、天文十六年戌申三月二十二日 鉞立^{ちようななて}：(下略)」と

あり天文十九年^(庚戌)辛亥十一月二十三日御遷宮と本庄胤村が千葉氏の重臣と共に重要な役割を果たしている。

風俗史的研究の視点から見て享祿か天文かと言うことになるはずが二十年ぐらいいの間で、風俗が大きく変わると言うことはない様に思われるが描画の視点から見ると私が本文中にいろいろとりあげた様に、天文年代の方が良いと思われる。

この外に建物などの面から検討する必要もあるが此処では紙面も限られているので省略した。

また本稿を作成するに当って、この絵巻の原所蔵者である大宮の栄福寺御住職及千葉市立郷土博物館の御協力をいただいたので文末であるがこのことを記し感謝の意を表すことにしたい。

注

- (1) 『妙見信仰調査報告書』三七頁・別表2・千葉市立郷土博物館(平成四年三月)
- (2) 前掲書・二九頁
- (3) 『肖像選集』日本歴史学会・吉川弘文館
- (4) 『装束図譜』故実叢書・鈴木敬三
- (5) 『妙見信仰調査報告』三・六〇頁・千葉市立郷土博物館(平成六年三月)

(千葉県立中央博物館 歴史学研究科)